

もくじ	
▽学会創立40周年記念	25
▽夏期セミナー参加記	27
▽第79回大会のご案内（第一報）	28
▽学会動静	28

## 【学会創立40周年記念】 会長挨拶

安河内 朗

2008年に学会創立30周年を迎え、学士会館で記念事業を開催したのが、つい先日のようです。その後も引き続き皆さまのご協力とご支援をいただき、恒次祐子大会長の第78回大会の中で無事に40周年記念事業を開催することができましたこと、心よりお礼を申し上げます。

この10年間、さまざまなことがありました。2009年には初の日本生理人類学会編として丸善から「カラダの百科事典」が刊行されました。翌年の2010年にはオーストラリアのパースで Alan Bittles 先生により第10回国際生理人類学会議が開催されました。次の第11回目国際会議は、ヨーロッパ人類学会議と重なる開催年を避けるため、3年後の2013年に Douglas E. Crews 先生によりカナダのバンフで開催されています。その前年の2012年には、初の Inter-Congress としての国際会議が、中国の北京で開催されました。日本を除くアジアでの国際会議は2000年の韓国以降2回目となります。さらにこの年は、英文誌 (JPA: Journal of Physiological Anthropology) がそれまでの冊子体からオープンアクセスの電子ジャーナルとなり、Springer Nature (BioMed Central) から刊行されることになりました。そして2013年に戻りますが、この年は長年の懸案事項となっていましたインパクトファクターがついに JPA に付く記念すべき年となったわけです。また同年は、オープンアクセスジャーナルを世界に発信するプログラムとして科研費の国際情報発信強化助成 (B) が単年度採択となり、さらに2015年には同助成が5年ものとして採択されました。これを機に、これまで活動の少なかったアジアにも注力し

つつ世界に発信すべくさまざまな取り組みが展開されました。なかでも他国の学会や大学とジョイントのシンポジウムやセッションを積極的に実施しました。学会では、韓国人間工学会 (2014: 韓国, チェジュ島), European Anthropological Association (2014: ロシア, モスクワ; 2016: クロアチア, ザグレブ), Human Biology Association (2016: 米国, ハワイ) と、また大学ではマレーシアの UTAR(2016), 韓国のウルサン科学技術大学校(2016), タイのマヒドン大学 (2017), インドネシア大学 (2017), マレーシア・サバ大学 (2018), モスクワ大学 (2018 予定) との間で実施しています。また、和文誌 (日本生理人類学会誌) ですが、現時点では第23巻第3号まで会報 (PANews) とともに恙なく刊行を終えています。

来年の6月には第79回大会を東海大学の高雄元晴先生が、10月には第80回大会を名古屋市立大学の早野順一郎先生が主宰されます。また第14回国際生理人類学会議はシンガポール大学の Chew Fook Tim 先生が主宰されます。今後とも日本生理人類学会は、国際化をより広く進めつつ、学術界にも、社会にもより大きく貢献していけるよう努力して参ります。次の50周年記念事業では、さらに実りあるご報告ができますよう、どうぞご協力ご支援のほど、よろしくごお願い申し上げます。

## Congratulations to the 40th Anniversary of Japan Society of Physiological Anthropology

Elena Godina (Former President of International Association of Physiological Anthropology, Professor of Lomonosov Moscow State University)

It is a great honour and a great pleasure for me as a former President of International Association of Physiological Anthropology to congratulate the members of Japan Society of Physiological Anthropology with its 40th anniversary!

Founded in the 1970's by famous Japanese researchers – anthropologists and physiologists – the Society soon became the leader in multidisciplinary research aimed at evolutionary development and worldwide variations in physiological functions of humankind.

The Society soon started publishing its own journal, now Journal of Physiological Anthropology with wide range of topics, such as living in normal and abnormal environment, nutrition and morphology, sports physiology and medicine, work physiology, and others. The journal soon became one of the most important in the field. Now it is a famous, open access journal with high impact-factor, included in main citation indexing systems.

For the four decades of its existence, the Society acquired a world-wide reputation as the foremost organization in studying of the interactions between humans and environment. Soon the Society recruited new members from other countries and established the International Association of Physiological Anthropology (IAPA), with biennial International Congresses of Physiological Anthropology (the last one in Loughborough, UK).

In the early 2000's on the initiative of the founding fathers of physiological anthropology in Japan - Professor Sato and Professor Kikuchi - Russian anthropologists also joined the IAPA and became involved in its activities. Moreover, a special Russian-Japanese Symposium on Human Physiology and Human Ecology was held in Russia in 2005. Since that time a lot of interactions between Russian and Japanese researchers took place, and now we are looking forward to a new meeting in December 2018. A lot of important questions concerning human well-being in different environmental and ecological conditions will be discussed at this symposium, and we are looking forward to welcome our Japanese colleagues and friends in Moscow again.

Finishing my short address, I would like to congratulate once more all members of the Japanese Society of Physiological Anthropology with the celebration of the Society's 40th Anniversary, to

praise them for their great achievements in this scientific field, and to wish them further success, health and happiness!

**Douglas E. Crews (President of International Association of Physiological Anthropology, Professor of Ohio State University)**

On the 40th Anniversary of the JSPA, I would like to first thank those visionary physiological anthropologists who 40 years ago established this society. Most importantly I would like to acknowledge Professors Sato and Baker for introducing me to the members-hip of JSPA. Since this introduction 16 years ago, I have had multiple opportunities to meet, collaborate, and become friends with JSPA members. My association with JSPA has allowed me to expand my own research agenda and contribute to the growth of physiological anthropology in the USA and elsewhere. For this I am grateful to the leadership of JSPA and all my colleagues who are members therein.

**Chew Fook Tim (President of International Congress of Physiological Anthropology in 2019, Professor of National University of Singapore)**

On the occasion of the 40th Anniversary of the Japan Society of Physiological Anthropology, I am very pleased to offer my warm greetings and heartfelt congratulations on this significant milestone.

The society has grown in strength and provided a much needed, unified voice for the study on Physiological Anthropology in Japan and around the world. With the expansion in recent years to involve more interactions and researcher from around the world in your activities, I have had the privilege and pleasure of friendship and scientific exchange with members of the society. This has not only enriched us all together but expanded our outlook as to the far reaches of anthropological physiology.

I wish the society continued success, and a wonderful year of much deserved celebration and proud reflection. Happy 40th Anniversary!

## 【夏期セミナー参加記】

李相逸（北海道大学大学院）

2018年9月3日（火）に1泊2日の日程で生理人類学会夏期セミナーが開催されました。私は、今年度の夏期セミナーの副実行委員長を勤めさせていただきました李相逸と申します。夏期セミナーは2012年度から、6年間京都で開かれていましたが、今年は初めて札幌で行いました。北海道は心理的・物理的に遠いので、参加申し込みが少なかつたらどうしようと心配していましたが、幸いにも33名の先生方や学生の皆様にお越しいただきました。ご参加頂いた皆様に改めて感謝申し上げます。今年は教育講演2件、若手研究発表会、若手の会企画、研究部会の講演3件といった豊かなプログラムで、充実した二日間でした。各プログラム担当の先生方、また実行委員の皆様、大変お世話になりました。

本セミナーの最後に岩永先生がおっしゃっていましたが、私も夏期セミナーは学生のためになることにその存在意義があるかと思えます。学生参加者の感想が気になっていたのも、今年初めて参加した北大生数名に感想を聞いたところ、「学生をメインとして準備されていたプログラムがとてもしゃかった」、「とてもフレンドリーな雰囲気、教員とも親密にフランクな交流ができてよかった」など、とてもポジティブな感想でした。可能であれば全ての学生参加者にご意見や感想についてもお聞きしたいところですが、今回は二人の学生参加者に今年の夏期セミナーの様子や感想についてお願いしました。以下に彼らの参加記を紹介致します。

大橋路弘（九州大学大学院）

本年度、実行委員を担当致しました九州大学の  
大橋路弘と申します。私自身は去年の京都での開催に引き続き2度目の参加となりました。私からは、今回行われた教育講演と、睡眠研究部会の様子をご紹介します。

初日は北海道大学の山仲勇二郎先生より「ヒト生物時計の構造と機能」というタイトルでお話をいただきました。時間生物学の歴史から現在まだ解き明かされていない謎に至るまで、幅広く奥深い内容を語っていただきました。最後にはクイズも出題され、内容理解がより進んだのではないかと思います。翌日は「人類生態学者に聞く、研究生活の魅力～フィールドワークで解き明かす、人類のライフスタイルと健康～」と題しまして北海道大学の山内太郎先生にご講演を頂きました。フィールドワークならではの難しさや楽しさを語っていただきました。また、研究を続けるうえでの心構えも教えていただき、これからの参考になりました。その後睡眠研究部会として、国立精神・神経医療研究センターの北村真吾先生から「アクチグラフィによる睡眠評価」、東京工科大学の榎本みのり先生からは「意外と多い睡眠障害」という題目でお話をいただきました。北村先生からは、アクチグラフィを用いた睡眠評価の実際や、気を付けるべきことなど、多くの実践的なことを教えていただきました。榎本先生からは睡眠障害の全容をお話いただき、また個々の障害の様々な動画を見せていただきました。まるで起きているかのようなREM睡眠行動障害の映像には、参加された多くの方が驚いていました。

どのプログラムも興味深いお話ばかりでとても充実したセミナーでした。ご講演いただいた皆様、ご参加された皆様、実行委員の先生方はじめ学会関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。



若手研究発表の様子



活発なディスカッションの様子

### 赤間章英（千葉大学大学院）

私は、活発な議論がかわされた若手の研究発表と、研究の実践的活用へと視野を広げた骨研究部会、ものづくり研究部会の講演内容をお伝えさせて頂きます。

若手の研究発表は、12題のポスター発表が行われ、活発な議論がかわされました。おそらく学部4年の学生には自身の研究を発表するはじめての機会だったのではないのでしょうか。結果の出ている学生にとっては、今後の方針や実験結果の解釈を見つめ直す良い機会に、これから実験や調査に取り掛かる学生にとっては、取るべき方法が明確化した有意義な時間になったのではないかと思います。

骨研究部会では、広島大学の黒坂志穂先生より「骨から実現する健康」というタイトルでご講演いただきました。足底の骨構造に関する丁寧なご説明と、骨を鍛える健康体操を参加者全員で体験しました。楽しい音楽とともにダンスを組み合わせた健康体操を通して、運動をいかに楽しく続けられるかを工夫することの大切さを学びました。ものづくり研究部会では、千葉大学の志村恵さんと、下村義弘先生による生体計測技術をいかに活かすかについて参加型講演をいただきました。講演の前半では、下村先生に“ものづくり”における生理人類学的視点の必要性について、志村さんからは今行われている、もしくは計画中の生体計測技術を活用した実例をご紹介いただきました。後半では生体計測技術を活かすことで将来どのようなインターフェースが必要になるのかについてグループワークを行いました。何が必要かを考えるのは意外と難しいと感じました。学生と教員がグループになり、短時間で思い思いに考えを巡らせ、まとめていくグループワークは新鮮で良い経験になったと思います。

毎年、夏期セミナーでは、実行委員の方々による新たな試みがなされているように存じます。来年度もぜひ多くの皆さまがご参加いただき、なにか刺激を受け取って、ご自身の研究に活かされることを心より願っております。最後になりましたが、参加者の皆さまと実行委員長を務められました北海道大学の若林斉先生を始めとする、実行委員の方々には深く御礼申し上げます。

### 【第79回大会のご案内（第一報）】

高雄 元晴（東海大学情報理工学部）

来年6月に東海大学高輪キャンパス（東京都港区高輪）において第79回大会を開催いたします。来年は学会創立41周年であり、本大会は学会の新たな歴史を始める第1ページとなります。基調講演には大阪大学蛋白質研究所元所長でANBAS（株）社長の永井克也名誉教授をお招きし、自律神経活動を指標とした食品・アロマの機能評価手法と実際についてお話しをいただきます。またシンポジウムは2件を予定しています。シンポジウム1では「片頭痛の人類学」という表題の下、東海大学の永田栄一郎教授、慶應義塾大学の柴田護講師、獨協医科大学の辰元宗人准教授がそれぞれ神経内科学者の立場から、片頭痛の分子遺伝学および発症メカニズムから患者さんに優しい照明環境まで幅広く最先端の研究動向についてご講演をいただきます。またシンポジウム2では「幸せに老いるための生理人類学」として、大阪大学医学部の福田淳名誉教授と人間科学研究科の権藤恭之教授からそれぞれ生理学と心理学の立場から長寿の方々の脳の働きと幸福感についてお話しをいただきます。41周年という新たな歴史を開く大会にぜひ皆様奮ってご参加ください。

会期：2019年6月1日（土）～2日（日）（日程変更の可能性あります。会場予約の関係で2018年12月に最終決定します。）

場所：東海大学高輪キャンパス（JR・京急「品川駅」に近く便利です。）

### 【学会動静】

#### <大会予定>

- ・第79回大会：2019年 春期、東海大学
- ・第80回大会：2019年 秋期、名古屋市立大学
- ・第81回大会：2020年 春期、長崎大学

from Editor

次号No.1の原稿締切は2019年1月25日です

▽PANews 編集事務局

村木里志（九州大学大学院芸術工学研究院）

メールアドレス panews@jspa.net

※お問い合わせはこのアドレスにお送り下さい。